

今日のみ言葉 267 「主はすべての苦難の中から救  
いだされる 」 2017.03.08

正しい人には、幾多の苦難がある。しかし、主はすべてその中から救いだされ  
る。（詩篇 34 の 19）

Many are the afflictions of the righteous, but the LORD rescues them from them all.

神の目からみればみなさまごまの自分中心という本性（罪）のない人はいないので、正しき人というのはいない。しかし、ただ神の正義やその全能を信じるだけで、正しいとみなしてくださる—ということはすでにはるか数千年の昔に、旧約聖書のアブラハムにおいて言われ、キリストの時代以降もこの本質的真理が福音となって今日までつづいてきた。

キリストは神の本質を持っておられ、そのキリストが私たちのそうした自分中心の罪というものを担って十字架で死んで下さった—そう信じるだけで正しき者だとみなしてくださるようになった。 そのような正しさを神から受けたものは、神からも愛される。しかし、苦難はなくなるわけではない。

それは、旧約聖書の時代から今日にいたるまでずっとつづいてきた。キリストご自身、完全な正しさと愛によって歩まれたが、その伝道の最初から大きな苦難がつきまどってきた。

キリスト以降の時代においても、ただちにローマ帝国の数百年にわたる長い迫害の時代が続き、ようやくキリスト教は認められたが、そこからまた周囲の国々に福音を告げようとする人たちは、その先々で大きな迫害を受けることになった。

日本でも 300 年近い間、キリスト教は厳禁されて見つかるとうれがたい拷問を受け、処刑されることになった。 そのようなこと以外に、身近な生活のなかでも、キリスト教信仰を与えられ、この世の流れとは違った正しいあり方を求めていくとき、何らかの苦しみが伴うことは常に生じてきた。キリストも「この世では苦難がある。」といわれた。使徒パウロも、「わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない」と言った。（使徒言行録 14 の 22)

苦難 — それは信仰あるものも、信仰を持たないものもさまさまの形で襲ってくる。 病気や事故、災害、また、周囲の圧迫、迫害、人間同士の憎しみや排斥等々、いかに科学技術が発達しようとも、また大学など教育機関が普及しようとも、人間の苦しみは次々と新たなものが生まれてくる。科学技術の発達で

以前には想像もしなかったような苦しみが新たに生じてきた。数多くの有毒廃棄物、排気ガスによる環境汚染、交通事故、さらに核兵器や原発といった取り返しのつかないような大災害をもたらすものまで作られてしまった。また医学、薬学の発達で薬の副作用など新たな痛みも多く生じ、寿命は伸びたが、それによって健康を失ったまま、寝たきりや孤独が長期にわたるといった以前にはなかったような状況が生まれ、長く痛み続けて死ぬ人たちが増大してきた。

それらを見てもわかるように、人間社会はどこまでいっても苦難はある。闇はある。そうしたこの世の根本的な問題から救うのは何なのか、それこそ、そうした人間が生み出した一切の困難や危険、さらには自然の災害などの痛みからも救いだす力を持っておられる神の力を受けることである。聖書に示された愛と全能の神だけが、そうしたあらゆる苦難のなかから救いだす力を持っておられる。

困難な時代を前にして、そのすべてから救いだす神の力については、ここにあげた御言葉のように、すでに数千年も昔から明確に示されている。

私たちは、今後生じるかも知れないいかなる闇にも光を与え、どんな困難からでも― 死の力にも勝利する神の力に頼り、そこからじっさいに救いだしていただけることを信じる―その単純な道を歩ませていただきたいと思う。

\*\*\*\*\*

野草と樹木たち エゾニュウと田沢湖 秋田駒ヶ岳 2013.7.19 撮影



これは  
秋田駒ヶ  
岳の山頂  
部に近い  
所から、田  
沢湖を望  
む風景で  
す。手前

右の白い花が、エゾニュウで、この植物は、1～3メートルほどにもなり、北国の高山ではよく目立つ花です。北海道北端の礼文島では、利尻富士を望む低い山の斜面にも多くみられ、もう50年数年前の学生時代に北海道の山に登る旅の最初に訪れた礼文島で、一番に目についたもので今もその風景がよみがえってきます。

ここでみられる田沢湖は、秋田県にあり、その湖水の深さが400mを越えて日本では最も深い湖と言われ、その色合いも微妙に変化ある深い藍色～青色となるということで

す。この湖は火山の噴火によるカルデラと言われていますが、その成因には不明なところもあるようです。

蝦夷ニューという名前にあるニューとはアイヌ語で、こうしたセリ科の大型植物を指している言葉。セリ科の植物には、春先に私の住む徳島県の低山でもよくみられるセントウソウというごく小さな花をつける高さ20センチ内外の野草から、このような3メートルにも達するような大きいものまでさまざまのものがあり、水辺や湿った田んぼなどにもみられる食用のセリだけでなく、野菜のニンジンもこのセリ科で、なじみ深いものでもあります。

このエゾニューはこの写真ではわかりにくいですが、大型で、草の仲間としてはどっしりとして力強さのみられるものです。セリ科特有の多くの小さい白い花々を次々と放射状に丸い形に出して、そこから日の光を受けて純白の花は、私たちに親しみをもって語りかけてくる花なのです。空や湖の青い色、山を覆う真っ白い霧、白い花、そして植物の緑と、変化に富んだ山々の静けさと力…それらすべてに神の力と命、そして限りない美と清さを感じます。（文、写真とも T.YOSHIMURA）